

# カフカの自己弁護という名の傷

——短編『田舎医者』の解釈を中心に——

奥 田 誠 司

## I

1917年1月／2月に執筆された『田舎医者』(*Ein Landarzt*)は短編集の標題でもあり、全体の中では2番目に配置されている。この物語は主人公の医者が当惑している場面で始まっている。つまり10マイルも離れた村で重病人が待っているのに、馬車に繋ぐ馬がこの冬の過労が原因で死んでしまい、往診に行けないのである。女中のローザが馬を借りようと村中を走り廻っているが、見込みがないことはわかっている。ところが、田舎医者がここ数年来使ったことがない豚小屋の戸を蹴飛ばすと、馬の温かみと匂いのようなものが立ち昇り、突然2頭の馬と馬丁が登場する。この2頭の馬は脚を胴体にぴったりとくっつけた姿で、全身から湯気をたてながら現われる。田舎医者はその立派な馬に魅惑され、ローザを馬丁に委ねて自分は嬉々として馬車に乗り込む。そして馬丁の掛け声とともに、田舎医者に乗せた馬車は「急流に投げ込まれた材木のように」(E 125)<sup>1)</sup>疾駆し、瞬時のうちに患者の許に運ばれる。この『田舎医者』の前半部分は、カフカにとって決定的な転換点となった1912年に「水の中を前進するように」(T 183)一気に創造された『判決』(*Das Urteil*)誕生の過程をイメージしたものであると思われる。カフカは『判決』成立の際の覚え書きでも、「この物語はまるで本物の誕生のように汚物や粘液で蔽われてわたしの中から生まれてきた」(T 186)と述べているように、『判決』はそれ以前カフカに書くという行為において、絶えず要請されていたある理想への到達を意味するような作品である。

そして田舎医者に乗せた馬車を曳く「この世のものとも思えぬ」(E 128)2頭の馬とは、書くことに対するインスピレーションの源泉を表象

したものである<sup>2)</sup>。この主人公を乗せた馬車が引きさらわれていく場面では、田舎医者の自我をコントロールしている意志は崩壊し、自己の意識を超えた力、即ちフロイトのいう「無意識的なもの（エス）」が支配している。「エスに対する関係において、自我は馬の圧倒的な力を統御する騎手に比較される。……騎手が馬から落ちたくなければ、しばしば馬の行こうとするほうに進むしかないように、自我もエスの意志をあたかもそれが自分の意志であるかのように実行に移すことがある。」<sup>3)</sup>実際『田舎医者』の前段階とも言える『判決』の中でも、父親によって溺死の刑を宣告されたゲオルクが、何かに駆り立てられるように部屋を飛び出し河へと向かう場面がある。ここでは、はっきりとゲオルクの行為の主体は、自分の意志ではどうすることもできない力を表わす「エス」<sup>4)</sup>へと移行されていることがわかる。

## II

さてその後、患者の家に到着した田舎医者は、病んでいる少年の両親と妹によって出迎えられる。この状況設定は、『判決』の2ヶ月後に書かれた『変身』(*Die Verwandlung*)のモデルの再現である<sup>5)</sup>。そして田舎医者は2頭の馬の嘶きに喚起されて、少年の脇腹にある傷を発見する。

「右の脇腹の腰のあたりに、手の平ほどの傷が口を開いている。薔薇色（ローザ）でその色合は微妙な変化を見せ、奥のほうは暗く、縁のほうに近づくにつれて明るくなり、細かい粒のように凝固した血がこびりつき、まるで鉱山の入口のように見える。……太さと長さがわたしの小指ほどもある蛆虫どもが、もともと薔薇色のからだに血を浴びてさらに紅くなり、傷の内部に食いこんだまま白い頭を振りたて、おびただしい脚をうごめかせ、身をよじって光の当たるほうへ這い出そうとしている。」

(E 127) カフカは患者の少年に「みごとな傷をもってほくはこの世に生まれてきた。この傷だけがほくの身仕度のすべてでした」(E 128)と語らせている。この傷は『判決』でロシアの友人の代理人として登場する父親のもつ太股の傷痕や、『変身』でグレーゴルが父親の投げた林檎によって受ける傷と同質のものである。カフカがこの傷をはっきりと認識するのは、1912年の『判決』が書かれた夜のことである。「あの物語ではど

の文章も、どの言葉も、どの——そう言ってよければ——音楽も《不安》と結びついています。あの時の長い夜にはじめて傷がぽっかりと口を開けたのです。」(M 235)

この傷とは確固たる生の拠り所を奪われ、決して自己確証され得ないというカフカの存在の「不安」を象徴的に示している。その「不安」とはカフカの場合、罪悪感に由来する明瞭なものではなく得体の知れないものであるがゆえに、決して反省的なレヴェルでは捉えることができない。カフカはヤノーホ (G. Janouch) との対話の中で「根拠の分らぬ罪悪感ほど烈しく魂の中に定着するものではありません。それは——はっきりした根拠がないからこそ——いかなる悔いや償いを以てしても除き去ることができないからです」<sup>6)</sup>と語っている。1910年の『日記』の中でカフカは「ぼくの心に浮かんでくるすべてのものが自分の根底からではなく、どこかせいぜい中程のところから浮かんでくる」(T 11)と述べている。また初期の短編『祈る人との対話』(*Gespräch mit Beter*) では「これまでわたしは自分が生きているのだと確信した時期など一度もないのです」(E 189) という記述が見られるように、カフカは日常的現実に対する自己の極めて不安定で脆弱な基盤というものを強く意識していた。カフカの作品に描写されている主人公達の人生が断片的で、さらに彼らが追放されている世界も断片的にしか語られないのは、こうした作者自身の抱えもつ実在感の喪失に感応する結果である。

カフカは他人の生には何か確実な根拠がありそうに見えるのに、自分には内部においても、また外部世界においても何一つ自明なもの、必然的なものを見出すことができないのである。カフカはそのかけらさえ授かることなく、この世に生まれてきた。彼の悲劇は自己の内部存在の深淵との分裂性、並びに他者との間に血の通うルートも断たれてしまっていることである。換言すれば、彼は自己に対しても他者に対しても二重の意味において根源的な関係性を喪失しているのである。この根源からの離隔に対する苦痛こそ、カフカが「根拠の分らぬ罪悪感」と呼んでいるものに他ならない。この他者との間に拡がっている深い亀裂のために、カフカは共同社会から疎隔されているのであって、決して自発的に社会的同一性を拒絶したのではない。逆に彼には共同性の欠如ゆえに、温か

い人間的親和への渴望も一層強いものがある。このことは『学会への報告』(*Ein Bericht für eine Akademie*)の主人公ロートペーターとは対照的に、檻の中で飢えるしかない『断食芸人』(*Ein Hungerkünstler*)の主人公が臨終の際に漏らす告白が証明している。「わたしは断食するほかからしたのであって、他にどうしようもなかったのです。……わたしは自分の口に合う食物を見つけることができなかったのです。もしそのようなものを見つけていたら、きっと世間を騒がせたりしないで君や他のみんなと同様に腹一杯食べていたことでしょう。」(E 171)このような断食とは、生きる能力の欠如に対する代償行為として生じた生存形態であったことがわかる。即ち檻の中で餓死の危険を孕みながらも断食を続ける芸人と、檻から逃れ出るために人間の行動を模倣するロートペーターとは方向性は逆であるが、それらの行為の原点は同じである。双方とも「自己の中に破壊しがたい何ものかが存在することを、絶えず確信していなければ生きていけない」(H 67)という共通の認識に基づいている。

カフカにとって書くこととは、こうした社会との異和感や孤立感に対して、他にどうしようもないという内的衝動から生じた必然的行為である。彼は「毎日少なくとも1行は自分に向ける」(T 11)ことを誓っており、「祈りの一形式としての書くこと」(H 252)でどうにか生にしがみつこうとしていた。これはとりわけ父ヘルマンとの関係が決定的な要因であったことは言うまでもない。『父への手紙』(*Brief an den Vater*)の中で「ぼくはあなたに対して自信を喪失し、その代償として得たものは限らない罪の意識でした。この限りなさを想起しながらぼくはかつて的確に《彼は恥辱が自分の生涯よりもさらに続くことを恐れている》と書いたことがあります。」(H 143)……「ぼくは書くことによって、またそれと関連した事柄に没頭することによってささやかな自立と逃避の試みを重ねてきました」(H 159)と述べているように、書くことはカフカにとって父親の勢力圏からの脱出の試みであり、彼が生き残るための一種の出口の役割を果たしていた。この書くために必要な孤独への内的志向と、共同体に対するやむことのない憧れとが、カフカのほぼ全作品を貫く重要なライトモチーフを形成しているといっても過言ではない。

### III

カフカの自己存在の無根拠性ともいうべき傷は、彼が以前から意識していたものであったが、1912年フェリーツェ・バウアー (Felice Bauer) という一人の女性と知り合うことで一層鮮明なものとなってくる。彼女とはその後、2度婚約するが2度とも婚約を破棄することになる。彼は友人のマックス・ブロート (Max Brod) の家で初めてフェリーツェに出会った時の第一印象を『日記』に記している。「F・B嬢。8月13日にブロートのところへ行くと彼女は食事中だったが、ぼくにはどうも女中のように思われた。……骨張ったうつろな顔。……ほとんど潰れた鼻。ブロンドのいくらか固い魅力のない髪。がっしりした顎。腰を下ろしながら彼女を初めて前よりもよく見たが、座っている時もう揺るがしがたい判決を下していた。」(T 178) (傍点筆者) カフカがフェリーツェとの最初の出会いで早くも「揺るがしがたい判決」を下した理由に、彼女がプラハではなくベルリン在住の女性であったことが挙げられる。つまりこの「揺るがしがたい判決」とは、彼女に宛てて手紙を書く決意を導き出したということである<sup>7)</sup>。実際それから約1ヶ月後の9月20日から、殆ど毎日手紙が書き綴られる。そして同時にこの時期、書簡を交わすことが彼の創作活動の推進力にもなっていく。たとえば『判決』は、フェリーツェへの最初の手紙を書いた直後の9月22日から23日にかけての夜に書かれているし、この年の秋には『失踪者』(*Der Verschollene*)の大部分、さらには『変身』も執筆されている。

文通とはカフカの場合、モノログ的な日記に宿る以上に対話的機能を帯びたものであり、フェリーツェとの往復書簡はそれ自体会話の役割を担っていたと言える。彼は「この文通はそれを超えて現実に辿り着くよう、ほとんどいつもぼくは憧れているのですが、ぼくの惨めさに相応する唯一の交際なのです」(F 304)と述べている。このようにカフカには彼女との距離を縮めることで、より人間的な交流へと変容させたいという欲求はあるが、結局のところ彼がフェリーツェと親密にしていられるのは手紙の中だけである。およそ500通以上に及ぶ書簡のうち、約半数は彼女との最初の出会ってから7ヶ月後によく二人が再会するまでの

時期に書かれている。この時間的・空間的距離をはさんだ肉体不在の交流こそ、彼には唯一他者との意志疎通を図る手段であった。ここではノイマン (G. Neumann) が指摘する「肉体間の分離の保全が唯一の目的である言葉の形式」<sup>9)</sup>ということが当て嵌まる。極端な言い方をすれば、この距離さえ保全されていれば、手紙を書く相手は誰でもよかったのである。フェリーツェはいわば、他者との交際が書簡という形態をとらざるを得なかったカフカのための憐れむべき「殉難者」(B 115) に過ぎなかった。「ぼくの想像するところでは、彼女は何よりもぼくのせいで極度の不幸を背負っている。……彼女は罪もないのに苛酷すぎる拷問刑を宣告された囚人だ。ぼくが不正を働いたために、彼女は拷問にかけられているのだ。その上ぼくは拷問具の役まで務めている。」(T 331) さらに『ミレナへの手紙』の中には「殆ど5年というものわたしは彼女に斬りつけてばかりいました」(M 30) とある。これは『田舎医者』の中では、豚小屋から2頭の馬とともに現われる野獣のような馬丁が女中のローザに縋りつき、頬に傷を負わせる行為として表象されている。また患者の薔薇色 (ローザ) の傷の炎症は、田舎医者意識の中では後に残されて馬丁の犠牲となっている女中のローザの形姿を想起させるものとなっている。そしてその想いの中には、カフカによって「最後の血の1滴まで責め苛まれた」(F 266) フェリーツェに対して、責任や義務を回避しているという自己呵責の想いが内包されている。1917年にカフカが『田舎医者』を中心に計画した短編集の重要なテーマの一つが「責任」<sup>9)</sup>であった。

カフカは『田舎医者』を書いた半年後の1917年8月に最初の咯血にみまわれ、肺結核の宣告を受ける。1917年9月5日、プロートとヴェルチュ (F. Weltsch) に宛てて「ぼくはこうなることを予見していた。君は『田舎医者』の中の血まみれの傷を憶えているだろう？」(B 160) と書いており、カフカが『田舎医者』の少年の傷を彼自身の肺の傷の予感として捉えていることが窺える。さらに同年9月中旬、プロートへの手紙の中で彼はこう独白する。「よくこんなふうに思えることがある。脳と肺はぼくの知らないうちに了解し合っていた。脳が『もうこれ以上やっていけない』と言い、そして5年後に肺が手助けすることを同意したのだ。」(B 161) カフカは1917年にフェリーツェと2度目の婚約をするが、

これはすぐさま彼の内部に結婚に反抗する意志を呼び醒まし、頭痛や不眠に悩まされる。そして喀血となって彼の肉体を引き裂いた。結局この年の12月には結核を理由に彼女との婚約を最終的に解消することになるのだが、フェリーツェとの堪え難い共同生活からの解放を願い、この病気をおびき寄せたのはまさにカフカ自身の内なる欲求であった。この肺の傷に関してカフカは「その炎症がF（フェリーツェ）で、その深さが自己弁護を意味する傷の象徴」（T 329）であると『日記』に記している。この言葉には、確かに自分は罪もないフェリーツェをおよそ5年に亘って苦しめたが、これは決して意図したことではなく、この生まれもった致命的な傷ゆえに自分ではどうすることもできなかったものであり、カフカ自身もまた彼女との交渉を通じて「繰り返し同じ傷の溝を抉られた」（T 330）のだという自己弁明の想いが込められている。

#### IV

『田舎医者』では少年の傷は発見されるが、癒しえないまま背後に残される。この傷は『学会への報告』の主人公ロートペーターの腰の傷へと受け継がれていく。『学会への報告』は短編集『田舎医者』の最後に置かれており、その成立時期は1917年4月と推定されている<sup>10)</sup>。この作品は前述したように、かつて猿であった主人公が人間を模倣することでいかにして人間社会に適応していくか、その経緯を報告するものである。報告の冒頭で、「ほぼ5年の歳月がわたしを猿であった時代から隔てている」（E 147）と回想されている。ここに記されている「5年」前とは文字通りカフカ文学誕生の契機となった1912年のことを示唆している<sup>11)</sup>。

この猿はアフリカの黄金海岸で、ハーゲンバックの狩猟探検隊によって捕獲される。その際彼は銃弾を2発、頬と腰の下に受ける。ロートペーター（赤面ペーター）という名前は、その頬に残された赤い傷痕に由来している。もう一つの腰の下にある傷が『田舎医者』の少年の脇腹にある傷を継承したものである。彼の記憶は、ヨーロッパに向かう汽船の中甲板に置かれた檻の中での目醒めとともに始まる。その檻とは「全体は直立するには低すぎ座するには狭すぎ、それゆえ中腰の姿勢となって両膝を震わせて」（E 149）いなければならないようなものである。これは

グレーゴルが閉じ込められた部屋や、断食芸人の檻と同じ領域を示している。ただしグレーゴルの場合、監禁状態にあるとはいえ「あらゆる方向に向かって邪魔されずに這い廻れる」(E 80)空間は残されている。しかし妹のグレーテが壁や天井を自由に這い廻れるように家具を運び出そうとした時、彼は「人間的過去の忘却」(E 80)に繋がるという気持ちに苛まれており、その志向性はロートペーターと同様、人間共同体に向けられている。ただ『変身』では共同体への憧憬の段階に留まっていたのが、『学会への報告』では人間世界に飛び込むことが絶対条件となる。要するに、グレーゴルの独房と化した部屋が極限にまで縮小化され、身動き一つできないのが猿の置かれた状況である。「わたしは生まれてはじめて出口なしの状況に陥ったのです。……これまではいくらでも出口があったのに今は一つもない。……わたしには出口がなかった。しかしどうあっても出口を造る必要があった。出口なしではわたしは生きることができないからです。」(E 150)檻の中で閉塞状態にある猿には、自らの猿猴的根源への帰還の可態性は完全に閉ざされている。そこで彼は生き延びるために猿であることを断念し、「人間出口」(E 154)を見出すという考えに到達する。ここで彼は自分が求めたのは、「あらゆる方向に向かって開かれている偉大なる自由の感情」(E 150)ではないと断わり、意識的に「出口」と「自由」という概念を区別している。檻の中から観察した人間は「なるほど好きなように動き廻っているが、まるで一人の人間かと思われるほどに、みながいつも同じ顔をし、同じ動きをしている」。

(E 151)ロートペーターの眼には人間の自由とは錯覚であり、一種の自己欺瞞として映るだけである。これは主体的意志を喪失し、機能化された存在と化した非人間的状況に対する辛辣な批判である。人間は自由であることへの郷愁を抱きつつ、同時にまた不安や恐れに怯えることのない即物的存在にも憧れを抱いている。なぜなら、人間は何ものかに依存したり、逃避したりして自己を疎外されたままにまかせるとき、ある種の安息感を覚えるからである。こうした本来の自由に眼を覆い、既成の価値体系に自己を従わせることによって、不安から逃れようとする傾向をカフカは自己欺瞞と見做すのである<sup>12)</sup>。

ロートペーターはもし彼が「自由の信奉者」(E 152)であれば、人間

の濁った眼差しに現われる出口よりも、大海への逃走のほうを選んだであろうと報告している。だがその結末は、再び捕えられて以前よりもっと酷い檻に入れられるか、大海原に呑み込まれて溺死するかである。いずれにせよ、消滅の道を辿る行為に他ならない。ここでは『判決』のゲオルクの溺死が一時的な無形態への再融合であり、新しい生命の誕生を象徴した<sup>13)</sup>のとは異なり、何一つポジティブな要素は存在しない。彼にはたとえ人間社会が虚偽性の上に構築された世界であろうと、生き残るためには「人間出口」を求める以外選択の余地はなかった。猿は執拗な努力を重ねて、最後には人間の言葉を話すことにより「平均的なヨーロッパ人の教養」(E 154)を習得する。彼の腰の傷は癒え、傷痕が残っているだけである。この快癒した傷跡こそ、猿にとっては人間社会への適応の証である。しかし他方、ロートベーターは彼の猿猴性と完全に訣別しているわけではない。深夜、宴会や学術上の集会から帰宅すると、調教半ばの小柄な雌チンパンジーが待っている。そこで彼は「猿の流儀」(E 154)で、彼女と愉快的一時を過ごす。だが昼間になると、調教を受けつつある動物の分裂と錯乱とが宿った彼女の眼差しに耐えきれない。これほど我執を断念したロートベーターでさえ、カフカの他の主人公達と同様に二つに引き裂かれた世界の「境界地帯」(T 341)で暮らしているのである。

## V

『田舎医者』の最後で「裸で悲惨きわまりない時代の寒気に晒され、この世の馬車とこの世のものとも思えぬ馬に曳かれて」(E 128)雪の荒野を彷徨し続ける主人公の行き着く先が、『学会への報告』の冒頭でロートベーターが陥っている何処も一面に塞がって、まるで出口がない残酷極まる状況である。カフカの実生活で言えば、1914年末『審判』(*Der Prozeß*)の執筆を放棄し、「もはや書き続けることができなくなり最後の境界線まで来てしまった」(T 276)彼自身の姿に照応する。当時カフカは、もう一つの出口とも言えるフェリーツェとの関係も婚約解消により中断し、二つの相容れない世界が離ればなれになり、まさに出口のない八方塞がりの迷路へと追い込まれる。『審判』のヨーゼフ・Kはあたかも

「恥辱」<sup>14)</sup>が生き残っていくかのような惨めな死を迎えるが、現実のカフカは二重に根源的な関係性を断たれたまま、「いかなる悔いや償いを以てしても除き去ることができない」罪の意識よりも深い「恥辱」<sup>15)</sup>とともに生き続ける運命にあった。

この時、再び救済の試みとしてカフカの心に甦ってきたのがフェリーツェのことである。1914年11月30日の『日記』には「人界から隔てられたところにいる何かの野獣のように首をふたたび揺り動かしながら、F（フェリーツェ）をもう一度手に入れる試みをするかもしれない」（T 276）と書かれているように、翌年1月には二人はボーデンバッハで再会し、数日をともに過ごしている。しかし以前に『判決』が彼女との最初の出会いのすぐ後に生まれ、『審判』が彼女との最初の婚約決裂の直後に現われたのとは異なり、ここでは既にすべてが原理的に体験し尽くされており、何一つ新たなものは産まれなかった。それ以後、短編集『田舎医者』に着手するまでのほぼ2年間はカフカの執筆活動は完全に停止している。この時期いかにしてカフカが人間社会の側で出口を見出そうとしたかが、『学会への報告』の中で回想されている。1917年の『日記』にカフカはこう書き込んでいる。「人間共同体、動物共同体の全体を見渡し、その根本的な偏愛、願望、倫理的理想を認識し、これを簡単な規定に還元して自分が徹底的にすべての人に気に入られるように、できるだけ早く自分をこの方向へ展開することに努めてきたということです。」（T 333）

それと同時にカフカが一時的なものであれ、生の回復術として試みたのが「これまでの人生の輪郭をなぞってみる」（B 195f.）ことであった。『断片』（*Fragmente*）の中でカフカは、「ほくには書くことができなくなった。それで自伝的調査を計画してみた。自伝そのものではなく、できるだけ小さな事実の調査と発見である。ほくはそれをもとにして自分を立て直してみたいのだ」（H 281）と言う。この定義は1917年のカフカが置かれていた状況をも言い表わしているように思われる。実際1916年から17年にかけての冬、カフカは妹のオットラが借りていたアルヒミステンガッセ（錬金術師通り）の小さな家で深夜創作に励むという生活を送る。まさにその時書かれた『田舎医者』もまた、この種の回顧的自伝の

一つに属するものである。厳密に言えば、『判決』から『審判』に至る1912年から14年にかけてカフカ自身に起こった出来事の物語化である。『田舎医者』に関してはカフカも珍しく満足感を覚えているように<sup>16)</sup>、彼自身の実生活の記録的な要素が抹消され、まるで全体が一編の詩のような幻想的な世界へと昇華されており、カフカの創作上の新たな一段階を示すものであると言える。

#### 注

- 1 カフカのテキストからの引用は以下の省略記号とページ数で本文中に示した。なお、邦訳は『決定版カフカ全集』（新潮社）を参照させていただいた。  
B = *Briefe 1902-1924*. Hrsg. von Max Brod. Frankfurt a. M. 1983. (吉田仙太郎訳)  
E = *Sämtliche Erzählungen*. Hrsg. von Paul Raabe. Frankfurt a. M. 1987. (川村二郎・円子修平訳)  
F = *Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit*. Hrsg. von Erich Heller und Jürgen Born. Frankfurt a. M. 1986. (城山良彦訳)  
H = *Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß*. Hrsg. von Max Brod. Frankfurt a. M. 1983. (飛鷹節訳)  
M = *Briefe an Milena*. Hrsg. von Jürgen Born und Michael Müller. Frankfurt a. M. 1986. (辻理訳)  
T = *Tagebücher 1910-1923*. Hrsg. von Max Brod. Frankfurt a. M. 1986. (谷口茂訳)
- 2 Vgl. Fingerhut, Karl-Heinz : *Die Funktion der Tierfiguren im Werke Franz Kafkas*. Bonn 1969, S. 130f.
- 3 Freud, Sigmund : *Das Ich und das Es*. In : *Gesammelte Werke* Bd. 13. Frankfurt a. M. 1969, S. 253.
- 4 „Georg fühlte sich aus dem Zimmer gejagt (...) Aus dem Tor sprang er, über die Fahrbahn zum Wasser trieb es ihn.“ (E 32)
- 5 Hiebel, Hans Helmut : *Franz Kafka. Ein Landerarzt*. München 1984, S. 56.
- 6 Janouch, Gustav : *Gespräche mit Kafka. Aufzeichnungen und Erinnerungen*. Frankfurt a. M. 1981, S. 106.
- 7 Deleuze, Gilles/Guattari, Félix : *Kafka. Für eine kleine Literatur*. Frank-

- furt a. M. 1976, S. 106.
- 8 Neumann, Gerhard : „*Nachrichten von Pontus.*“ *Das Problem der Kunst im Werk Franz Kafkas.* In : *Franz Kafka Symposium.* Hrsg. von Wilhelm Emrich und Bernd Goldmann. Mainz 1985, S. 115.
  - 9 1917年4月22日のM. プーバー宛ての手紙の中で「責任」について言及している。
  - 10 Binder, Hartmut : *Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen.* München 1982, S. 225.
  - 11 Vgl. Mecke, Günter : *Franz Kafkas offenes Geheimnis.* München 1982, S. 118.
  - 12 Vgl. Janouch, a. a. O., S. 37.
  - 13 ミルチャ・エリアーデ : 『聖と俗』, 風間敏夫訳, 法政大学出版局, 1969年, 122ページ。
  - 14 Kafka, Franz : *Der Prozeß.* Hrsg. von Max Brod. Frankfurt a. M. 1983, S. 194.
  - 15 「恥辱とは人間が根源から離れてしまっていることへの想いを取り除けないことを言う。それはこの離隔に対する苦痛であり, 根源との一致に戻りたいという無力な願望である」とボンヘッファーは定義している。Bonhoeffer, Dietrich : *Ethik.* Hrsg. von Eberhard Bethge. München 1966, S. 22.
  - 16 「〈田舎医者〉のような作品からは一時的な満足感を得ることができる。もっとも, あのようなものがまだ書けるとしてだが (ほとんどありそうにもないことだ)。だが幸福とは, ただぼくが世界を純粹なもの, 真実なもの, 不変的なものに高めることができるときにのみ, 得られるのだ」(T 333) とカフカは1917年の『日記』に記している。

〈付記〉 本稿は日本独文学会第50回春季研究発表会 (1996年5月, 明治大学) における発表原稿に加筆を施したものである。

# Die Wunde Kafkas, die „Rechtfertigung“ heißt —Eine Betrachtung zu der Erzählung *Ein Landarzt*—

Seiji OKUDA

Die Erzählung *Ein Landarzt*, die als Titelgeschichte der Sammlung von Kafka selbst veröffentlicht wurde, entstand im Januar/Februar 1917. Die Geschichte beginnt mit einer Verlegenheit des Landarztes. Obwohl ein Schwerkranker in einem zehn Meilen entfernten Dorf auf ihn wartet, kann er ihn nicht aufsuchen, da sein Pferd die Nacht zuvor im eisigen Winter verendet war. Aber da stößt der Landarzt die Tür eines seit Jahren unbenutzten Schweinestalls auf, und plötzlich treten ein Pferdeknecht und zwei Pferde hervor. Kaum ruft der Pferdeknecht „Munter!“, so wird der Wagen mit dem Arzt fortgerissen „wie ein Holz in der Strömung“. Hier wird der Wagenlenker durch das Unbewußte bzw. das Freud'sche Es kontrolliert. Die den Wagen ziehenden „unirdischen Pferde“ weisen auf die Inspirationsquellen für das Schreiben hin. Die erste Hälfte des *Landarztes* beinhaltet den Entstehungsprozeß des *Urteils* im Jahr 1912.

Im Nu bei der Familie des Kranken angekommen, wo sich das Modell der *Verwandlung* wiederholt, entdeckt der Arzt die Wunde des Jungen : „In seiner rechten Seite, in der Hüftengegend hat sich eine handtellergroße Wunde aufgetan. Rosa, in vielen Schattierungen [...]“. „Rosa ist auch der Name des Dienstmädchens. Kafka erkennt deutlich die „rosa Wunde“ in jener Nacht, in der er in einem Zug *das Urteil* niederschrieb. Diese Wunde entspricht einer Narbe des Vaters im *Urteil* sowie der Wunde Gregors in der *Verwandlung*. Sie symbolisiert Kafkas existenzielle Angst des Sich-Nicht-Bewährens. Die Angst beruht bei Kafka nicht auf dem Schuldbewußtsein, sondern

auf dem Gefühl der Unvollständigkeit seiner eigenen Existenz.

Der Ursprung seiner Tragik liegt in der Spaltung des Inneren, und zugleich fehlt Kafka von Geburt an der Sinn für Gemeinschaft. Daher ist das Schreiben die ihm einzig mögliche Lebensrechtfertigung geworden. Die Beziehung zu Felice Bauer, mit der sich Kafka zweimal verlobt und zweimal die Verlobung aufgelöst hat, bleibt nur ein „Verkehr in Briefen“. Das gewaltige Ausmaß des Briefverkehrs beruht auf ihrer körperlichen Abwesenheit. „Fast fünf Jahre habe ich auf sie eingehauen“, schrieb er später. Felice ist sozusagen eine Märtyrerin. Dies ist im *Landarzt* in der Szene der Verletzung des Dienstmädchens durch den Knecht dargestellt. Rosa symbolisiert Felice, die Kafka am Tag der ersten Begegnung wie „ein Dienstmädchen“ vorgekommen ist. Die „rosa Wunde“ des Jungen erinnert im Bewußtsein des Arztes an Rosa, die dem Knecht geopfert hat. Die Erzählung thematisiert offensichtlich das Problem der Verantwortung. *Ein Landarzt* sollte mit anderen Stücken unter dem gemeinsamen Titel „Verantwortung“ erscheinen.

Im August 1917 kommt es zum Ausbruch der Lungentuberkulose. Kafka hat im *Landarzt* die Lungenwunde prophezeit. An Max Brod schrieb er : „Auch habe ich es selbst vorausgesagt. Erinnerst Du Dich an die Wunde im *Landarzt*?“ Er identifiziert seine Lungenwunde mit der Wunde des Jungen. Im Tagebuch bezeichnet er Felice als „Entzündung“ der Wunde und nennt seine Lungenwunde „Sinnbild der Wunde, deren Tiefe Rechtfertigung heißt“. Diese Äußerung deutet darauf hin, daß Kafka auch durch den Verkehr mit ihr „immer wieder im gleichen Wundkanal aufgerissen“ wurde.

Der Arzt, der sich am Ende der Erzählung mit irdischem Wagen und unirdischen Pferden umhertreibt, befindet sich in der Situation Josef K. s, den die Scham überleben sollte. Mit dem *Landarzt* versucht Kafka, die Umrisse seines bisherigen Lebens nachzuziehen. *Ein Landarzt* scheint eine Art Versuch einer selbstbiographischen

Untersuchung zu sein : die Periode vom *Urteil* zum *Prozeß*. Hier gelingt es ihm, die Welt wie ein Gedicht ins Reine zu heben. Daher hat Kafka der Erzählung eine „zeitweilige Befriedigung“ abgewonnen.